
けいおん！　—お姉ちゃんに何が・・・—

しのぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！ ―お姉ちゃんに何が・・・―

【Nコード】

N5323P

【作者名】

しのぶ

【あらすじ】

朝はいつもと同じお姉ちゃんだったんです・・・いつも通り起こして学校に見送って・・・でも・・・お昼休みには違ってたんです・・・軽音部の人達全員が心が入れ替わったようにおかしくなって・・・どうしてこんな事になっちゃったの？・・・私どうしたらいいの？・・・

こんにちは、平沢憂です。

今日お姉ちゃんは軽音部の練習があるからって、いつもより2時間早く家を出たんです。

いつもの時間でも遅刻ギリギリになる事が多いお姉ちゃんは、当然なかなか起きてくれませんでした。

憂 「お姉ちゃん！早く起きて！今日は早朝練習する約束なんですよ？」

唯 「は！憂、今何時?!」

慌てて飛び起きたお姉ちゃんはジャムトーストを啜えたまま走って行きました。

憂 （もう、お姉ちゃんったら、もう少し早く起きてくれたらゆっくり歩いて行けるのに）

私もそろそろ学校に行く時間になったので、窓の鍵を掛けたか確認をしに自分の部屋、お姉ちゃんの部屋と見て回ったのですが、お姉ちゃんが体操服を置き忘れてる事に気付きました。

憂 （確かお姉ちゃん、今日は6時限目が体育の授業だった筈・・・
お昼休みに届けてあげれば間に合うよね）

そしてお昼休みになったので私は純ちゃんと一緒にお姉ちゃんの
教室まで体操服を届けに行っただんですけど・・・

そこに居たお姉ちゃんは・・・いえ、お姉ちゃんだけでなく濡さ
んも、律さんも、紬さんも、軽音部の皆さんの様子が変だったんで
す。

憂 「お姉ちゃん！体操服忘れてるでしょ？持ってきたわよ」

唯 「にゃんにゃんにゃん♪！ありがとにゃん！」

憂 「うふふ、お姉ちゃん可愛い♪猫ちゃんの真似？」

唯 「別に物真似なんかしてないです！私は普段通りにしてるだけ
です！」

憂 「『です』って・・・どうして敬語？」

唯 「やってやるですうー！」

純 『ねえ憂・・・唯先輩いつもと少し違わない？』

純 ちゃんが耳元に近付き小さな声で聞いてきました。

憂 『うん・・・言葉使い、と言うか雰囲気と言うか・・・少し変よね?』

純 『何か3年生だけで流行ってる遊びなのかな?・・・』

憂 「・・・お姉ちゃん?」

唯 「どうしたのかにゃん?♪」

憂 「・・・・・・・・・・・・・・・・」

漣 「ん?・・・うゝいゝゝゝ!暗い顔してどうしたのおゝ?」

そう言う漣さんが後ろから急に抱きついてきて頬擦りを始めました。

漣 「えへへへゝゝ・・・・・・・・うゝいゝゝゝ・・・・・・・・」

憂 「ちよ、ちよと漣さんどうしたんですか?」

漣 「別にどうもしないよゝゝ、私いつも憂にこうしてるじゃないゝゝ、えへへへゝゝ」

憂 「いつもって・・・そんな・・・ちよ、止めて下さい!」

漣 「うゝいゝゝゝ!すきすきゝゝ!チュゝしちやおゝつと」

紬 「こら滯！ここは教室だぞ！仲がいいのは分かったから、チュ
ーとかそう言うのは家に帰ってからゆっくりやれ！」

・
・
助かった、滯さんの動きが止まった・・・今のうちに腕を解いて・
って、紬さんまで話し方が変になってる！

紬 「まったく二人はいつも仲良しだよな！」

律 「そうよねえ、本当に羨ましいわ♪」

律さんまで・・・いったいこれって？・・・
詳しく話を聞こうとした時、授業開始5分前の予鈴が鳴りました

純 「憂！早く教室に戻らなきゃ！」

憂 「う・・・うん」

お姉ちゃん達の事は気になりましたけど、仕方なく私と純ちゃん
は自分の教室へと戻りました。

純 「ねえ憂」

憂 「何？純ちゃん」

純 「私思っただけどさあ」

憂 「うん」

純 「さっきの先輩達って言葉使いが変になったって言うより、それぞれの言葉使いが入れ替わってたと思わない？」

憂 「そう・・・かな？」

純 「何かが原因で先輩達の精神が入れ替わったとか！」

憂 「ちよつと純ちゃん、いくらなんでもそんな事ある訳ないじゃない！それに精神が入れ替わっちゃってたら普通慌てるでしょ？」

純 「だから何者かによって先輩達には元から今の精神状態だったって記憶が植えつけられてるのかも・・・」

憂 「そんな・・・純ちゃん、まさか宇宙人の仕業とか言うつもりなの？」

純 「それはわかんないけど・・・でもさ、紬先輩の話方ってどこことなく律先輩っぽくなかった？」

憂 「んっ・・・そう言われればそんな感じがするかも」

純 「逆に律先輩は紬先輩みたいな話し方してたし・・・」

憂 「じゃあ滯さんの話し方って・・・あれってお姉ちゃん？」

純 「そうでしょ？」

憂 「え〜！お姉ちゃんあんなおバカな話し方じゃないもん！」

純 （そうかな？・・・唯先輩ってあんな話し方してると思うけど・・・）

憂 「でも、お姉ちゃんは滯さんっぽくなかったよね？」

純 「唯先輩がにゃんにゃん言ってたのは多分、梓の精神と入れ替わってたんじゃないのかな？」

憂 「それじゃ梓ちゃんは・・・」

そう言われて改めて気が付いた事がありました。

確かに今日の梓ちゃんは様子がおかしい・・・でもそれは朝早くから軽音部の練習に参加したので疲れてるだけだと思ってたんです。休み時間の度に声を掛けても黙って机に伏してるだけで・・・でも純ちゃんの言葉で梓ちゃんはただ疲れて黙ってたんじゃないって・・・そんな気がしてきました。

授業が終わって放課後、私は音楽室に行こうとする梓ちゃんに声を掛けました。

憂 「ねえ梓ちゃん？今日は体調悪かったの？帰らなくて平気？」

梓 「ああ、ありがとうな、大丈夫だから心配しなくていいよ」

何となく滯さんっぽいような違うような・・・とにかくこのままでは気になって晩御飯を作り家に帰る事もできません。

私と純ちゃんは音楽室へと向かう事にしました。

私達が扉を開けると中にはお姉ちゃん達が居て、いつも通りお茶会を開いて騒いでました。

ただ役割分担はいつもとは違っていましたがけど・・・

紬 「律～！今日のお菓子何だ？」

律 「えっと、今日のお菓子は抹茶ようかんよ♪」

滯 「わ～～い、ようかんようかん～うれしなあ～」

唯 「駄目ですよ！お菓子の前に練習をします！」

滯 「まあまあ、ゆいにゃん、ようかんおいしそうだよ～」

そう言っつて滯さんはお姉ちゃんに抱きつかしました。

滯 「ゆいにゃんゆいにゃん～」

唯 「にゃにゃにゃ～んゴロゴロゴロ♪」

滯 「あ！憂だ！アイス食べたい！あ～い～すう～！あ～い～すう

」！
」

律 「お茶の準備をしよう♪シャランラシャラン♪」

こ・・・これは・・・純ちゃんの言った通りみんなの精神が入れ替わってる！でも何故？どうして？誰が一体何の目的で？！

考えがまとまらない、その時扉が開き梓ちゃんが入ってきました

梓 「おい！いい加減にしろよな！もうすぐ学園祭だって言うのに練習しないでどうするんだよ！」

やっぱり梓ちゃんの中には滯さんの精神が入ってるみたいです。どうすればいいの？・・・どうすればみんな元に戻るの？・・・私の頭の中は答えの出しようも無い疑問でいっぱいになりました。

とその時、純ちゃんが盛大に噴出し、おなかを抱えて笑い転げました。

純 「ぶう~~~~~！あはははは、梓！何その胸？！」

見るとそこには目一杯胸に詰め物をした梓ちゃんの姿がありました。

梓 「は？純ちゃん何言ってるの？胸って・・・私前からこうだけ

ど？」

純 「あははははは！その童顔で、その体系で巨乳ってありえないよ！」

漣 「ってか梓ちゃん、その胸はいくらなんでも大きすぎるよぉー！」

梓 「・・・・・・・・・・・・・・・・」

紬 「だよな！そんだけでかいと肩凝って仕方ないもんな！どれ、私が揉んでやろう！」

律 「ねえムギちゃん・・・もう少し、その・・・上品に話した方がよくない？」

紬 「えー！なんでだよ！私いつもこんな話し方じゃん！」

その後はなんだか緊張の糸が切れたって言うか、雰囲気が変わったのを感じ取れました。

そう・・・言葉使いがどんどん酷くなり収集が着かなくなってきました。

純 「憂・・・何か変だよ・・・」

憂 「お姉ちゃん達どうしたって言うの！」

梓 「胸は小さいより大きいほうがいいに決まってるだろ！羨ましいって視線で釘付けになるしな！」

紬 「そうだそうだ！大きい方がいいぞ！」

律 「ちよつとムギちゃん・・・そんなに暴れると下着見えるわよ・・・」

紬 「下着の1枚や2枚見えたって何だって言うんだよ！そんな事気にしてたらキーボードは弾けないぜ！」

唯 「にゃんにゃん♪喧嘩はダメにゃん！」

梓 「なあ・・・唯・・・」

唯 「何ですか？梓先輩？」

梓 「唯っていつもそんな話し方だっけ？」

唯 「そうですにゃん♪唯はニャンコだからにゃんにゃんしか話せないにゃん♪」

梓 「・・・・・・・・・・・・・・・・」

律 「ねえ、みんなお茶でも飲んで落ち着いて・・・おち・・・ついで・・・」

律さんが急に押し黙ったかと思ったその後、一気に爆発するかのよう大声で叫んだんです。

律 「あ~~~~!! もうこんな事やってられるか~~~~!!」

え? え??! 一体何が起こったのか私には理解出来ませんでした。

律 「もうゲームは終了! おしまい! 終わり~~~~!!」

唯 「え〜! 結構面白かったのにい〜」

梓 「どこが面白かったんですか! だいたい唯先輩のそのキャラ作りおかしいですよ! 私そんな『にゃんにゃん』言った事ないじゃないですか!」

唯 「え〜、あずにゃんはこんな感じだよお〜」

お姉ちゃん達はどうか罰ゲームのような事をしてたみたいですね。

話を聞いてみると、今朝の練習はあまりうまく演奏が出来なかったらしく皆で反省していたそうです。

二度と同じ所でミスをしないように何か罰を・・・的な意見があって今日1日誰かの真似をしようってなったそうです・・・

それでくじ引きの結果、お姉ちゃんが梓ちゃんの真似を、滯さんがお姉ちゃんの真似を、律さんが紬さんを、紬さんが律さんを、そして梓ちゃんが滯さんの真似をする事になったそうです。

漣 「でも梓・・・梓って私の事そんな風に見てたんだな・・・」

梓 「そ・・・そう言う訳じゃないですけど、真似をするにはまず形からって・・・」

漣 「それでその胸なのか？私の特徴って胸だけなのか？」

唯 「そう言う漣ちゃんだって・・・私そんなにおバカさんみたいな話し方してないもん！」

律 「いや、唯の話し方はあんなもんだぞ」

唯 「えゝ！ショックだよゝ！」

律 「それよりムギ！私の真似でどうしてそんな下品になるんだよ！」

紬 「律ちゃんだって・・・私そんなにポワポワしてないもの」

漣 「律、さっきのムギの姿を見て下品って思ったんだ？」

律 「あたりまえだろ！」

漣 「あれが下品だって感覚があるのにどうして自分では気付かないんだ？」

律 「・・・・・・・・・・・・・・・・」

梓 「とにかく先輩方が、それぞれ人の事をどんな目で見てきたのが分かりましたね・・・」

律 「ってか癖ってさ、自分では全然分かんないもんなんだな・・・」

滯 「ああ・・・」

お姉ちゃん達は凄く疲れたみたいで、結局この日の練習は中止になり皆家に帰る事になりました。
せっかく頑張って早起きしたのに、これじゃ意味ないと思います、やれやれ・・・

次の朝、今日も学園祭に向けて早朝練習をするみたいです。

憂 「お姉ちゃん！早く起きて！練習遅れちゃうよ！」

唯 「え?! 憂! 今何時?!」

いつものようにお姉ちゃんは慌てて着替え、走って学校へ行きました。

憂 「・・・・・・・・今日はお弁当忘れてる・・・」

お昼休みになったので急いでお姉ちゃんの教室にお弁当を届けに行きました。

憂 「お姉ちゃん！お弁当忘れたでしょ？持ってきたよ！」

唯 「あ！お姉ちゃん！」

滢 「お姉ちゃんだ！お姉ちゃん、お姉ちゃん！」

律 「お姉ちゃん大好き！」

紬 「ねえお姉ちゃんチューして」

それって・・・

もしかして今度は私の真似のつもり？・・・

憂 「え〜！私ってそんなキャラ？！」

一同 「お姉ちゃんお姉ちゃんお姉ちゃんお姉ちゃんお姉ちゃんお姉ちゃん」

私の印象って「お姉ちゃん」ってセリフだけなんですわね・・・ち
よっとシヨック・・・

はあ・・・

— おしめ —

(後書き)

例によって他の作品を考えてる時に頭の中に湧いて出たお話です
^ ;

メッセージも何も無い内容なので暇つぶし程度の感覚で
ポケ〜っとお読み頂けたらと思います
^ー^b

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5323p/>

けいおん！　－お姉ちゃんに何が・・・－

2010年12月17日01時05分発行